



始



特 241

262

部長會

繆

斌

著

寺島隆太郎譯

新興支那
指導精神

新民主主義

東京 青年教育普及會發行

149

特241
262



新民會
中央指導部長

繆斌著
寺島隆太郎譯

新民主義

東京 青年教育普及會發行



譯者のことば

日支事變を轉機として、待望久しかりし黎明が東亞の天地に訪れた。先づ北支に新設せられた中華民國臨時政府は、新民主義に基づき、王道の政治的建設を提唱して立ちあがった。而も今將に、更らに中支に延びんとしてゐる。これは明日の東亞の動向に深刻にして決定的な解答を與へたものと謂ふべきであらう。今や支那はこの新民主義によつて舊套を脱し若々しい活躍と洋々たる希望を懷いて前途に向つて一大旋回を試みてゐる。さすれば今日この新民主義の全貌に對して冷靜なる理解をもつことなしに來るべき時代を語ることは斷じて許されないのである。

筆者繆斌氏は、多年支那に聞えた情熱的政治家である。彼は北支に臨時政府

が樹立せらるゝやいち早く南方から馳せ參じて、蔣介石政權打倒、新支那建設に新民會の旗旛下に現にその中央指導部長の要職を務めてゐる。本書は氏が新民主主義の内容について検討を加へた決定的なものとも謂ふべきものである。

繆斌氏が曩日、南京政府の下にあつて黃甫軍官學校の教官たり、のち一九二一年江蘇省政府民政廳長にあげられ、更に一九三一年には國民黨中央執行委員となつた、又數年前、日本に遊び、日本精神研究に没頭し、「文武一徳論」の著を公刊してゐる。冷徹果敢な親日的理論政治家としての氏のプロフィールについては今更贅言を要しないところであらう。

昭和十三年四月

寺島隆太郎

新民主主義 目次

新民主主義の理論	一
新民史觀	一
新民主主義の實行論	一
甲 格物	一一
乙 致知	一二
丙 誠意	一四
丁 正心	一六
戊 修身	一八
己 齊家	二二

庚親郷……………三四

辛治國……………三九

一 禮治主義……………四二

二 德治主義……………五六

三 生産主義……………六一

壬 平天下……………七一

結論……………七五

新民主主義の理論

— 新民史觀 —

新民主主義は我々人類がよつて以て生存すべき自然法則である。

いふまでもなく生存は、萬物の等しく欲するところのものである。然し乍ら時として我々はこの第一欲求たる生存を完ふことが出来なくなる。生存能力を失ふといふことは抵抗力が無くなつたことである。

静謐だつた天地が一度び躍動の氣に満たされるれば、天地の間に存する人生も従つて躍動する。即ち一般に動力が與へられる時には必ずこれに伴ふ反動力がある。反動即ち抵抗力であつて、自然の法則である。一切萬物がこの抵抗力を

保有する場合は生存の欲求を完ふることが出来るが若し抵抗力を失つた場合それは必ず滅亡するに至るであらう。

生命をもつものはこの抵抗力を具へることなしに生存することは出来ない。然し乍らこの抵抗力を萬物が有する場合においてもその間、總て平等なるものではなく、優劣の差別と善惡の區分が存してゐる。そして優なるもの善なるものは道に適ひ、自然の法則に順應し、發展してゆくものである。一方劣等なるもの惡質なるものは、道にも適せず、自然の法則なるものに違反するものである。翻つて、人間の場合であるが、人はいふまでもなく萬物の靈長である。その抵抗力は一切の生物に比して最も大なるものをもつてゐる。然し乍ら同じ人間の中においても抵抗力の優劣善惡の區別がある。人生において、その優者善者は生存するが、劣者惡者は敗亡するであらう。それは云ふ迄もなく優者善者は

能く道に適ひ且つ自然に順應するからして、一層大なる抵抗力を具へるためである。劣者惡者の場合は道にも自然にも適さず違反するから従つてその抵抗力が微弱なるためであり、ついに生存の意欲を完うせず亡びゆくものである。

これによつて人類の歴史を眺めるならば、それは一つの動力對反動力の相生相尅の歴史である。

動力とこれにとみなふ反動力とが一定のバランスを保つてゐる場合は、所謂道にも適合し、自然の法則にも順應し、而も平和が得られるのである。

然し乍ら一旦動力と反動力とがバランスを失へば、立ちどころに崎嶇たる對立を現出する。恰かもそれは水に高下あり、上段の水が下流に向つて奔然流出する様にこの對立は戰爭なる現象を呼びをこす。従つて戰爭は不平なるものを平かにし、不和なるものを和らげるのがその本質である。若し不和なるもの、

不平なるものをして、眞に和らげ、平かにすることが出来ないならば、それは戦争の歸着すべき點から凡そ遠いものであつて眞正なる和平の説ではない。

更に又、一切の物が總て平等齊一でないといふことは物の本質、自然ともいふべきものである。

自然界において天道は絶へず運行し、生物界において適者は生存する。彼の春生秋殺、優劣善悪はこれによつて分れるのである。これは言ふまでもなく自然の定めた必然の法則である。

天が萬物に對する態度について例言するならば、恰かも園丁が庭の草木を裁理するやうなものである。繁茂その度を越えれば芟除し、更にひねくれ曲つた様なものは、抜き捨てゝしまふ。そして園丁は常に麗しき花、珍重な果實といつたもののみを培養する。従つて品種の内容は日に改良される。園丁が不良な

ものを捨て良いものを残し育てると同様、天が人間に對する場合も全く同様である。善者適者はこれを生かすが、劣者不適者は除き殺す。従つて人類は天のこの作爲により善の方向に向つて生活を適へ、惡を去るべく進んで行くであらう。由來天道には些かの私情もなく唯々善のみを佑けるのである。

かく觀じ來らば畢竟人類の競争は善と惡との競争、更に適と不適との競争と稱し得らるゝのである。

以上の理由によつて明かなる如く、人類の進歩はこの善と惡との増減盛衰によつてなされる譯である。依つて人類における進歩の歴史は決して一直線を歩むものでなく、循環的進歩乃至螺旋的な進歩（前進已まざるの進歩）の形式をとるものである。

天道は陰陽二つの働きてある。更にこの陰陽は、消長して晝夜並びに春夏秋

冬の別を織りなすのである。それは、夜に續く晝のごとく四季が一循して又元にかへる如く毎日進行してやまない。天道には一刻の不動も休息もない。而してこの動きは動と静の二つに彩られる。陽は動であり、陰は静である。一日のうち夜は静であり、晝は動である。一年のうち春夏が動であれば、秋冬は即ち静である。然しながらこの判然たるが如き動並びに静を精細に考察するならば、動中にも静を見、静中にも動の胎動を感ずるであらう。動の作用極まるところ静に達し、静の極點は動に至る。一動一静その變化は一日の休みもなく、くりかへされて行く。これ即ち天地自然の大道であつて、人類の進歩即ち善惡の増減盛衰もこれと全く軌を一にするものである。所謂善といひ惡といふもそれは表面上の結果を以て斷ずるに過ぎない。

善と呼ばれるものの中には惡はいくらかても潜んでゐる。惡の反面に又善の

一半が潜むことも當然である。依つて思ふに、人類歴史の盛衰の際、その盛時は總て君子のみであつたかといふと、さうではない。無論小人もその間に交つてゐるのである。たゞ兩者のバランスが君子が多いので、小人が蔽はれ、取り立てゝ惡といふに足りないのである。これと反對に衰へた時は全部小人だけだといふのでなく、君子もその間に混じつてゐるが何人にも、その數少くなく全く目立たないだけである。故に時代の榮枯盛衰は約言すれば君子對小人の消長、善と惡との消長である。故に人類の歴史的進歩は、一時と雖も、善惡の消長のなかつたことはない。其の表面のみ視れば、循環の出發點に復る様に見えるが決して事實はさうでない。

人類は善と惡との増加減少、互の消長をなすに當つて、其の善なるものを積み不善はこれを取り除く。善を積み續けるのである、よつてその進歩は限界が

ない。善を積み行くところその進歩は無限である。

恰かも車輪が前進する様に、もとの點に返つた様であるがそれは螺旋的な廻轉であつて決してもとの廻つたあとを循るのではない。

かくの如く天地はもとよりその間に存する森羅萬象の悉くは一刻の斷え間もない變化と前進とを續けて行つてゐるのである。即ち靜かにして動かざる如く觀念される大地も科學的な検討のメスを加へるならば、地質上の變化は一瞬と雖ども惹起してゐないことはない。人類其他の萬物の變化も亦さうである。

讀者よ、古今東西を通じて、一人でも容貌身體が全く同じだといふ人間があつたかどうか。これによつても人類が斷えず進歩の歴史を追つてゐることが證明されるではないか。

今吾々の新民主義は東洋における固有の文化の復興を提唱してゐる。然しな

がら盲目的に西洋文化を排撃せんとするものではない。大いに其の長所は採り入れたのである。萬事悉く古のまゝの状態にかへすといふのは、先聖の嘲笑を招くところとなるであらう。事々に西洋模倣をなすことは西洋の眞實をとり入れる所以でない。東洋には東洋固有の美德を有つてゐる。然も時代の推移は百餘年の消沈時代を経た東洋文化に新しい黎明を告ぐるに至つた。東方人類は須らくこの固有の文化を以つてその美點は飽くまでこれを保有し、以て衰頹の域に達した西洋文化を矯正すべきである。

「苟も日に新なれば、日に日に新にして又日に新なり」の革新的精神に基づいて明德を天下に明かにしたい。人類の生存をして天道の自然に適合せしめ、更にこの至上の域に止らしめて、人類の生活を理想の姿に合致せしめる。所謂我々の理想信條たる、「明德を天下に明かにする」といふことは天地人三才に通ず

る道を明かにして、然も一貫した方針をもつて之を貫くことに外ならない。即ち王道の宣揚である。王の字の意義は、上の一畫は天の意であり、下の一畫は地の象徴である、中の一畫が人である。中央の一直畫をもつて、この天地人の三つが一貫するといふのである。人間は天地の氣を享けて發生するものであるから天地と渾然一體をなすのは當然である。恰かも王の字の中央の一直線は丁度人體に血脈があるやうなものである。

新民主主義は王道を實際に行ふことを以て目的とする。然らばこの實行方法であるが、格物、致知、誠意、正心、修身、齊家、親郷、治國、平天下の九項目によつてこれを實踐に移すのである。

新民主主義の實行論

甲、格物

格物、致知、誠意、正心、修身、齊家、親郷、治國、平天下の九項目は新民主主義の實行過程即ち王道の實踐的順序を示したものである。この九項目は、これを克己、復禮の二つに大別して考へることが出来る。即ち格物、致知、誠意、正心、修身の五項目は克己であり、齊家、親郷、治國、平天下はこれを復禮として考へられる。

さて格物についての説明であるが、格といふのは「私」を去るといふ謂である。物は物質に對する欲望の私情、所謂王陽明が唱破した「心中の賊」を指す。格

は格闘の意味であつて、心の中にある物欲の私情と格闘することである。これが即ち格物の意味である。

若し夫れ人間がその私情欲望を全く克服し得たときは、人心と天心と合一して道心の境地を拓く。この境地こそ、曾て孔子が云つた「吾道一を以之を貫く」といふ信念。又陸象山が云つた「宇宙はすなはち我心なり、我心は即ち宇宙なり」といふ言葉に當るものである。即ち天心と人心との合一であつて、取りも直さず王道の發端である。

乙、致 知

吾人の心中、私慾の情が既に断たれ、天心と人心とが一貫の状態に達する時、即ち人の知識は良知の域に達することが出来るであらう。茲に良知の意義であ

るが、それは知識の本體とも稱せらるべきものである。反對に知識は本體たる良知の作用である。良知を致すといふことは従つて知識を善用するといふ意味である。

元來人の知識はこれを應用する際、善ともなれば惡ともなる。往々僅かな思ひ違ひをするが、少しでも違つた方に傾くと、その差は千里の大をなしてしまふ。丁度孔子時代における魯の少正卯や近世においてはカールマルクスのやうなものである。これ等の人々は偽言を滔々辯じ立て、僻行は固く採りて枉ぐることなく、醜惡なる著述は極めて廣く、非説と雖も豊富な資料と根據とを擁してゐる。一見するときは如何にも妥當のやうに考へられるが、實行に移すとどうしてもうまく行かないのである。

かくの如き知識行爲はとりも直さず、心中の物慾即ち王陽明の云つた心中の

賊にとらはれてゐるからである。又其の心、偏頗に、隱蔽され、然も眞誠の心、慈悲の心といつたものは少しもなく、そこに生れ培はれた知識は悪用である。以上のごとく若し吾々が知識を善用し、悪用をしまいと考へるならば、先づ良知を確立しなくてはならない。これが私慾を斷つたのちは知識を善用する即ち物格りて後知を致すといふ意味である。

丙、誠 意

我々は、今こゝに大公無私の天人合一の心境に立ち、更に既往得たところの知識は總て良知に基づいて悉く善用することが出来た。この上は固く志を立て、身を以て勉め勵み、自らを欺くことのないやうにしたい。これが即ち誠意である。この誠意を有する上に、然も日進月歩一日として息むことのない境地を

求めたい。かくする時、その効果は愈々大なるものがあるであらう。中庸に「至誠は神の如し」といふ言葉があるが、將にこの間の境地を述べたものである。又中庸に

「唯だ天下の至誠のみ能く性を盡すとなす。能く其の性を盡すときは則ち能く人の性を盡す。能く人の性を盡すときは則ち能く物の性を盡す。能く物の性を盡すときは則ち以て天地の化育に賛す可し。以て天地の化育に賛す可きときは則ち以て天地に參す可し」と述べられてゐる。

以上皆努力して怠らず、ついに人類萬物における一切の原理を深く知悉し得ることを示したものであり、然もこの原理に立脚せば人類萬物の履み行ふところのものをして天地の間に存する生存の道理に合致せしむることが出来るのである。この人類萬物の原理と天地生存の道理との合致點を體認することは至誠

の歸着點である。所謂天地自然が萬物を育成するところのものであり、更に天地と一體の原理に立つ王道の效用とも稱すべきものである。

丁、正 心

人間が既に前述のごとく、至誠やまざるところの精神を體し精進したとする。然し乍ら尙未だ心配なのはその精神が弛んだり、又は邪道に外れたりすることである。されば宜しくこの至誠やまざる精神を持続せしむるために所謂「正心」の工夫をしなければならぬ。然らば正心とはいかなるものであるか、これは「善」なるものを選んで然も固く之をまもる意味である。換言すれば正心とは善の選擇と之れの把持である。

しかし乍らこゝに言ふ心は所謂我の肉體に宿る心を指稱するものではない。

即ち心の中にある心、即ち我々の心の奥にあつて、これを支配し作用するところの實體をさすもので、より高き存在である。邵康節はこれについて、

「心は太極である」と稱してゐる。

太極とはいふまでもなく易經の道である。易經は陰陽の二大對立による變化と、それによる萬物の生々發展をといたものである。

更に周濂溪は「太極動いて陽を生ず、靜かにして陰を生ず、動く時は便ち陽の太極なり、靜かなる時は便ち陰の太極なり」と述べてゐる。即ち陰陽が一動一靜なる時に萬物は生成せられるのである。

心が太極であるといふ説は、又ライブニッツが活動を認めこれを物質の本性となし、所謂純一（單子）が自己を開展表現してゆくもの總て心の活動によるものであると稱したのと軌を一にする。故に心は瞬時も休止の状態にあること

はないことが知悉される。

この絶えず活動を続ける心が邪に陥らないやうにするには、所謂「正心」の努力を尊ばねばならないのである。

孟子が「是の心を推す」「放心を求む」「心を盡す」「心を存す」等といつてゐる言葉の眞義はいづれもこの正心の功について述べたものである。

戊、修身

心既に正しくなつた時、然もなをこれに加ふるにその範圍を擴充すべくつとめる。これが即ち修身である。こゝに云ふ修身とは然らば如何なる意味か。それは單に我々の肉體精神を修むるといふ意味のものではない。

我々の身體以外にこの身體をあらしむる實體ともいふべき別の身體があるが

これを平たく人格といふ言葉を以て表現せられる。こゝで用ひる修身は即ちこの身體以外の別の身體即ち人格を修むることを意味するのである。

禮記の中に「言に物有り、而も行に恒有り」といふ言葉がある。これは人格の權輿即ち始めてある。

元來人間は集團を離れて生存をとげることは出来ない。即ち個人は集團の中に存在するものである。従つて集團の中の個人は言語動作振舞一切守らなくてはならない一定の範圍が存在する。この範圍を越えることは許されない。人格が尊いのはその點である。

近世は、自由主義者なるものは、一切は自由であるべきといふ説をなし、その結果つひに個人主義に陥る。人類の必然性から凡そ遠いものである。その害悪は小にしては放蕩自己を失ひ、更に下剋上の觀念をなし放僻邪侈に流れ、そ

の極端を走るであらう。

更にこれを大にしては私欲は滔々として横流し、その結果所謂資本主義による種々の害毒を造成する。更にその資本主義の反動から階級闘争を生じ、種々の害毒を惹起する。以上の結果は皆、身を修むることを知らないための過ちである。

能く根本に遡つて人格を修むる者は、それ自身圓滿に治まることが出来る。且つ我身の圓滿に治まるものは、その結果を人にまで及ぼすことが出来る。

今日の資本家階級は、元來個人の自由主義に立脚してゐるからして、徒らに自己の利益にのみ汲々として、富をなすに些も道徳的信念なく、そのため己の勤勞階級を壓迫するのである。この弊害は人格を守ることの出来ない過ちである。

若しも資本家にしてその人格を守り、天より與へられたる使命に自覺し、道徳的な行動をなすにおいては、資本家たるの存在は、萬民にとつて恰かも生神様のやうになるに違ひない。世上の階級闘争の學説の如きは生ずる隙がないであらう。

又一方今日勞働者階級なるものは、唯だ勤勞の時間を減少し工賃を増加し、資本家を打倒することのみを以て目的としてゐる。これも翻つて人格を守ることの出来ない罪に歸する。

人間は先天的に智者、愚者、賢者、不肖者の區別が立てられてゐる。或は富貴といひ貧賤といふもそこに運命的に決められると云ふことが無いでもない。たとへば愚なる者が智者にならうとせず、又、不肖の者が賢者のごとくにならうとつとめることなしに、貧者がその富を、賤者がその高貴な位をのみ求める

といふことは果して妥當なりや否や。恐らく何人もその矛盾を指摘するであらう。故に労働者階級たるもの、靜かに自分の智慧、賢不肖等について省察し、その妄想を拂ひのけるべきである。そして富める者は更に儉約の精神を尊び、更に高貴の位を有するものはその徳を一層磨き、何人もその分に處して勉勵して行けば富貴はもとより先天的に人を限定するものではない。かくの如くなれば、即ち階級闘争の學說などは起ることがないであらう。

天下の治亂のかゝるところは、もとより一つの學說が民衆に浸潤するためではない。實際は人間がその人格をもつて自らを治め、克己を以て身を修めることが出来るか否かにかゝつてゐるといふことを銘記しなくてはならない。

己、齊 家

以上説明した格物、致知、誠意、正心、修身の五項目は皆これは所謂克己修徳の工夫に外ならないのである。而して克己修徳はいづれも個人の事である。今個人の克己修徳から更に進むとき、齊家、親郷、治國、平天下に至るのである。これはいづれも復禮の項目に一括せられる。

孔子は

「夫れ禮は先王、天に承くの道を以て、以て人の情を治む、故に之を失ふ者は死し、之を得ば徳生ず」といつてゐる。即ち禮とは天の大道に本づいて之を人生の法則に定めたものである。而して然らば人生の單位は何によつて出發せられるか。即ち人生の單位は家である。

家とはいふまでもなく、親子、兄弟、夫婦が相據つて生活を營み成立するものである。

而してその構成をなす、親子、兄弟、夫婦には夫々の本分が存してゐる。齊とはこの分を稱していふものである。

人間が生れるに當つて父母兩親に依るのではなかつたならば生育する事は出來ない。更に老境に入るに及んでは、その子女に擁けられなければ生存することが出來ないのである。それ故に孝といふ字を分析してみると、老境を自覺しては子に従ふといふ謂であり、更に子供は老人の意を承くるといふことになつてゐる。

天下の父母は誰れ一人としてその子を愛さないものはない。これを愛撫し、これを哺育し成長させ常に思ひを將來にかけてやるといふのは所謂愛の表現である。又或はこれを勵まし、監督しこれを叱撻訓戒するのも亦愛である。

愛することゝは何か。これに愛を注ぐといふことは如何なる意味をもつもの

であるか。その本義は生存を欲すればこそである。

父母に孝行するといふことも愛である。父母を愛するといふこともその生存を欲すればこそするのである。又父母がその子女に於ける場合、反對に子女が父母に於ける場合、更に兄弟、夫婦の間に至る迄、夫々その愛をもつてするのは皆生存のためである。その生命を欲すればこそである。

兄は弟を助ける。夫は外に出て、働き妻は家庭の内部を分擔し、各々その本分を守つて互に親愛し合ふといふことは生存の道である。而して一家の内部が睦じく親愛し合ふ時、その一家は繁榮するであらう。更に一國においても然り國內が互に親愛の誠をいたすときは天下皆その生存の目的を達するであらう。

この齊家の道に至つては我が東洋の家族主義の法則となるものである。

西洋思想には遺憾ながらこの齊家の道はない。従つてその根本たる家族主義

もない。そのため行きつくところは僅かに功利主義的な考へ方に基づく個人主義のみである。個人主義によつては父子兄弟ごとく別居する。甚しいものは夫婦と雖も同居上の愛慾に過ぎないものとなつてしまふ。そのためには一つ家に居て各々の経済も好き勝手に獨立となり、従つて家族が共存共榮の義務を負はないことになつてしまふ。

父子、兄弟、夫婦、夫々自分の見識を發揮し、各自の主觀を働かせる。その結果、父母が老境に及んでも必ずしも子女はこれを奉養しようとはしない。甚しいものになると、子供は相當の社會的地位と富とを有するやうになつても、その父母は尙生活のための仕事を續けてゆく場合がある。或はその上に、父母の生活費を一々計算、支給、收納するものもある。

西洋における老いたる父母が淋しく晩年を過して行く状態、孤獨と困苦の状

うたゝ人生最大の不幸を思はしむるものがあるのである。

西洋における個人主義は發展、展開して男女平等の説となる。この平等説は所謂個人主義の短所が展回せられたるものであるから、男女の關係においてもその權利義務は、どうしても相等しいものでなければならぬと考へてゐる。

これは全く所謂「天理、人生」に背反したものと言はねばならない。

天は萬物創造の眞義により男女の別を拵へ以て人類を生んでゐるのである。男女夫々性を分つところ、自然とその特性があるのは必然である。即ち男性は陽であり、女性は陰である。男性の特性が剛であれば女性の特性は柔である。所謂この陰と陽とを合體してよくつり合つて人類としての特性を發揮するのである。

所謂「剛柔相推、而生變化」といふ意味である。これを擴げれば「君子た

るの道はその發端を夫婦の和合に發生し、やがて天地の大にまで通ずる」のである。

これは全く人生において時間空間の支配を超越して存する法則である。さればこそ、男性に男性本來の陽的な剛毅な特性があり、女性には女性としてのかくれた優美な柔かな特性がある。従つて男は主として外を擔當し、女は内部の仕事をつかさどる、その間各々天から尊い使命を與へられ、夫々その本性を發揮するのである。これこそ、眞正な意味の平等と稱せらるべきものである。もしも無理に女性に對し男性のなす仕事をまかせようとすれば、單に女としての任務を完うし得ないのみでない。全くその根本の天理の必然にも背反するといふべきである。假令ば、政治の如きは當然男子のなすべきことであるにもかゝらず、女子が政治に干與するならば、これは全く我が東洋道德の許さないところである。

ところである。

故にこの事に關し書經においては、「牝雞無_レ晨、牝雞之晨、惟_レ家之索_{ナリ}」といつてゐる。これは支那古代般の暴君たる紂王がその夫人の言を用ひ失敗したことを喩へたものである。我が國の歴史を通觀する時、女が政治を擔つたとき、國の亂れないことはなかつたではないか。更に現代においては不幸にも宋家の三姉妹が中國の國政に干涉するに及んで、全く政治は敗れ國家は一片の焦土と化し去らうとしてゐる。これ何よりも明瞭なる證據と言はなければならぬ。

思ふにその本性を没却して、適しないものを用ひたとして、どうして圓滿に行こう筈があらうか。

今日に於ける西洋思潮にあつては、婦人の參政權を要求してゐる。甚だしきに至つては女子が戰爭にまで出て兵役にまで服せんとすることを求めてゐる。

一體然らば無理に男に家庭のことをつかさどらせ、裁縫、洗濯から炊事のことをさせたらどうだらうか。事は全くそれと同一である。

以上をもつて明かなるが如く男子には男子のつとめがある。又女には女の務が存するのである。こゝにこそ始めて平等といふことが出来るのである。一見女の家庭内の仕事を以て天下の政治と全く没交渉なるものと考へるのは浅見も亦甚しいといはねばならない。考へてみれば女子の内政に至つては實に天下の政治にも關聯をもつものである。閨門の秩序整ふと否とは、言ひかへれば、立身出世更に上流の風教に影響を及ぼすものである。全く家庭が紊亂して、國家が安泰なることは期せられない。これを思へば家庭を守る女子が全く一國の政治に無關係でないのであつて、政教の綱紀に實に重大な關係をもつものである。

以上齊家の目的は、所謂人倫の道を正し、更に男女の本然の別をわきまへることが主眼である。

これは要するに孝悌は家族主義の中心であり、即ち孝は縦の家族主義を表徴し、悌は家族主義を内容づけてゐるものである。

詳言すれば父母の關係は孝であり、兄弟の關係は悌である。これによつて我が國の家族關係は縦にして數千年その系統は歴然たるものであり、且つ横には四億の全民衆も姓氏を分類して數百の僅少なるものとなる。こうした縦横二つの關係が整然たる原因は、所謂この孝悌に基づいてゐるためである。孝悌の具體的なるものとして生きてゐる間は親しくこれを奉安し、死すれば神靈としてこれを祭る、その最後をよく慎み遠き先祖までも崇拜する。これ故にこそ根本を忘却しないのである。

顧みれば一家の中には一家の祭祀が存し、更に一族には一族の祭祀があり、天下には天下の祭祀が嚴存してゐる。天を我々が祭るのは即ち「天下の祭祀」のといふ意味である。

天地自然は萬物を發育せしむる母たるものである。従つてこゝに天下萬衆を治めんと欲すれば、當然天地がその父母であるといふことを知らねばならぬ。さすればその關係において四海のうち皆兄弟であるといふ理由がよく諒解せられる。

國家を治める方法は従つて民族祖先が皆父母たる關係に一貫するものであることを知らねばならぬ。それによつて國內皆同胞であることが立證せられるのである。更に一家を治める以上はその民族の祖先が我が父母の關係に立つことを知れ。よつて一族は皆親しい兄弟であらねばならず、その故に孝悌の行ひが

一族間に行はれることによつて一族皆治るのである。孝悌が一國に行はれればその一國は良く治まり、更に天下に行はれば天下治るの必然となる。この論を始にさかのぼつて先づ天下を孝悌のこの道により治めんとするにはその方法に於いて最初に先づ祭祀を重んじなくてはならない。所謂「祭政一致」といふ意味の眞義はこゝに存する譯である。この關係から我が中華民國をみるとその家族制度は數千年の今日を経て未だ失墜してゐない。實に四億の民を擁すると言ひ乍ら姓氏は僅かに數百にしか過ぎない。夫々一氏毎に宗譜があるのである。皆しかし乍ら察し定めることが出来る。そして誠によく孝道の道に本づいて家族の誼みをあつくしてゐるのである。

よつて今四億の民衆をしてこゝに數百の氏族團體に團結を固めさせることが出来るのである。更にこの各國の民族團體を糾合して天下萬邦が形成される。

家、國、天下その連携は、「孝悌」即ち親しきを親しむといふ道によつて遂行されないものはない。即ち孝悌の道によつて行はれるとき、嚴肅なるを以てせずとも、然もこの關係は必然的に圓滑無礙になしとげられるのである。詳言すれば孝悌は先づ家族間における「親愛精誠」により出發し、延いてこれを天下に及ぼし、つひに萬邦共に協和し、所謂最後の到達點たる王道の理想は完成せられるであらう。

庚、親 郷

中華民族四億の民衆はその氏族に基づいて分類すれば數百に過ぎないが、横に分布せられた地域は所謂四百餘洲の廣大なるものに亘つてゐる。今こゝに前述の「孝悌即ち親しきを親しむ」の道を推し行はんとするならば、何としても先

づ自己を中心として近きより漸次遠くに及ぼす以外に適當なる方法はないであらう。

故に家を齊ととのへたあとには、それにつゞくものとして、郷里に親愛の道を推し及ぼし、後始めて治國といふ終焉の目的に到達することが出来る譯である。

たゞこの「親郷」の内容に至つては、四書の一つである「大學」の中には漏れ記載されてはゐないが、老子の作になる「道德經」(老子)の中には詳細に亘つて記述されてゐることである。

即ち中國の氏族團體は、實に尨大なもので四方各地に分れて住んでゐる。従つて故郷ともならば、實際父母兄弟の共に在る所であり、若し一家のうちを除くならばその郷里が一番親しみが篤い譯である。然らばこの親郷の具體的實現であるが、これは「地方自治の内容の改善向上」といふことである。

家を治めるには一家團欒し、人倫を正しくすることである。若し郷を治めるにはどうするかといふことになるのであるが、矢張り家を治めると同様に親しきを親しむといふ道を郷里に推し及ぼすものに過ぎない。

周の制度においては郷里に對するものとして三つのものを規定してゐる。

即ち六徳、六行、六藝の三つである。これを以て親郷地方自治の教となしてゐるのである。

- 一、の六徳であるがこの内容は知、仁、聖、義、忠、和である。
- 二、の六行は、孝、友、睦、姻、任、恤の内容によるものである。
- 三、の六藝は禮、樂、射、御、書、數がそれである。

以上のうち言ひかへれば六行は合族の道であり、六藝は自治の方法である。お互にその情を以て和ぎ親しみ共に生き共に死する、利害はもとより生死まで

も共に致すこれが最大の境地である。

郷里の間において、貴重なこの三つの教を行へば、よく民を化すことも出来れば所謂醇風美俗も形成せられるのである。必ずしも天降りのなまの力をまつまでもなく、自ら治ることが出来るのである。

然るにもかゝはらず、現在行はれてゐる地方自治政治なるものゝ内容は、所謂地方に於ける官僚によつてなされる政治であり、専門の警察官によつて縛られる政治である。地方自治といふものゝそれに携はる人は單に政府のなす仕事の補助をするに過ぎない。政治命令を天降りの的に推し行ひ、甚しきは僅か警察的の任務のみを擔當するに至つてゐるのである。

以上は全く地方自治の眞義を没却するものである。地方自治の眞義はまつたくそんな形式的なものでなく、民衆を教化し、その地方に醇風美俗を拵へると

いふ點にあるのである。

従つてその重い任務は人民の徳行を振作し且つその才能天分を充分に教導することにあらねばならない。

然るに今日の地方自治政治の内容をみよ。彼等は人民の組織を如何にして嚴密にすべきか、如何にして人民の行動を監督し警戒すべきかといふ點にのみ汲々として人民を教化するなどといふことには思ひも及ばない。その弊害は極點に達し、人民は彈壓、壓迫を受けて、「自由」なく、政府と人民との關係は壓迫階級と、被壓迫階級とに二分せられ、對立せられるの悲しむべき現實に逢着してしまつてゐる。互に對立し、一は仇敵視し、一は怨府と目するに至るのである。終にはこの民怨が勃發して地方的な内亂を生ぜしむるまでに至るのである。

東洋の政治思想に期するところは、よく政治家が民衆を治めるといふことに

存してゐるのである。恰かも政治家を人民は君とみ、師と仰ぎ、政治即教育の境地に立脚し、漸次に社會の善良なる風俗を養成し、人民をして各々その本分を守り、その生業に安んぜしむるものである。

「日出づれば出て耕作し、日没に及べば仕事をやめて休息するのである。この平和この安寧、帝王の力など」といふものゝ何の我に關係あることであらうか。この古の言葉は、即ち、良く政治の行はれて全くその主權の存在を忘れるまでに及ぶ點、空氣の有難味の普遍的にして、つひにその存在も忘れるといふ様な境地こそ、東洋政治が、自治に求める極點である。かくてこそ始めてそこに官治の必要がなくなる意味である。

辛、治 國

地方が前述のごとく「親郷」の方法によつて能く治まつたとするも、まだこれだけのものでは國家の力が治まるといふ譯には參らない。

治國の要道はこゝに喋々論ずる迄もなく政治と教育が一貫し政治即ち教育の境地に立つものであらねばならない。

然し乍らこのたゞ徒らに「善を」といふ方法のみを以てしては國家は治められないといふことを知らねばならない。そこには必ず人民の生活を安定せしむる方策が施されなければならないのである。即ち人民が一定の生業を持つやうな制度の下に、人民が安心して營める業務のもてるやうにする。かくてこそ始めて人民は安堵してその生活を享受し、依つて落ちついた氣持に浸ることが出来るのである。こゝに生活を楽しみ乍ら、善を勵み協力するのである。これ故に治國の要道は政治、教育の以外にあらねばならないのである。さすれば、最

も民を養ふといふ點に一國政治の關心は注がなければならないのである。

以上のごとく政治、教育、養民、この三つが渾然一體化してこそ、政治の理想である、人民安居し業を樂しみて亂れないといふ點に達するのである。

彼の書經大禹謨の篇に「德惟善政。政在養民。水火金木土穀惟修。正徳利用厚生惟和」と述べてあるのは如上の政、教、養合一の意味を端的に述べたものである。

思ふに政治は正しくするといふ謂であらねばならない。正しきを正すといふ意味は、人民を齊ふるのに禮を以てする方法である。

次に教といふのは導くといふことである。人民を導くといふのは、その方法として徳によるのである。即ち徳を以て導くのである。

最後の養ふといふは生かすといふ意味である。然らば國民を生かすにはどう

するかといふと、産を興へるやうにしなければならぬのである。

以上、國民をして秩序あらしめるのに禮を以てするといふのは、まさに禮治主義である。

これを導くに徳をもつてするといふのは、徳治主義である。

これを生かすに産を以てするといふのは取りも直さず生産主義のことである。

治國の要道、治國の基本を「政、教、養」の合一に立脚する新民主主義は以上、禮治主義、徳治主義、生産主義の三つを以て方法としてゐるのである。

以下この具體的な内容に及んで説明をすることとする。

(一) 禮 治 主 義

禮の運用は、その具體的方法を法律制度によるものである。法律が時代に即

して行はれる時に、國はよく治めることが出来るのである。この治められた政治が時代の要求と合したるとき、政治の効果をみる事が出来るのである。

恰かもその時の流れと世の状態に合致した法を以て政治を行ふならば何等一切の障碍なく、恰かも水の流れにしたがつて舟を下すやうなものである。

故にこれによつて禮は別にさう難しいものでないといふことが分る。よく人間自然の情を推して、そこに制度が法則となり得るのである。

これによつて若しも、人心をよく收攬しようと思ふならば、必ず多勢の人の議論に鑑みて、政治運用を決定しなければならぬ。思ふにこれは當然のことであつて、法律は決して一個人にのみ關係をもつものでなく、普く多くの人々が當然利害關係をもつものであるからして、多數大衆の聲に即應して施行するといふことは將に當然のことである。

然らばこの多数の考へを集め取捨する方法として、現代社會に通用されてゐるものが二つある。

その一つは歐米に於ける代議制度であり、もう一つは、同じく一黨治國の制度である。

歐米に發生し、且つ發達した代議士による政治運用の制度は、その考へ方の基本は民衆の意志を普く暢達して、且つ個人の獨斷政治に陥ることを防止したものである。従つて必然的に政黨が生じ、そのため政黨の選舉政治が生じて來るのである。

政黨は國家からその費用を支給されてゐない。然らばそこに黨費と政戰費とをいづれからか捻出しなければならぬ。そこに黨に出資する資本家が、政黨の弱點に喰ひ入つて政治を操縱するやうになる。

資本家によつて操縱せられる代議政治は往々利に走り義を忘れてしまふことになるのは當然である。一方資本家は政治勢力をバックとして、その勢力はいよ／＼現はれ露骨となつてくる。かくて終に資本主義政治が横行するに及んで眞正なる民衆の意見はふさがれてしまふ。これがその弊害の一つで、政黨政治の宿命的な悩みなのである。

今一つは代議政治にあつては小數の人が多数の前には服従することになつてゐる。その事が、事の論議をなす場合、その是非善惡をわきまへず、たゞ自分の同類を引具して、甚しきものは金錢で買収するに至るのである。その間手段を選ばず、たゞ多数の獲得につとめ、多数の權力をたのんで是なるものまでも非とし、非なるものも是とすることが出来る。かくて政治は全く暗黒の政治と化してしまふ。これが政黨政治にみる第二の缺陷である。

この二つの弊害のあるところ、道徳は全く衰亡に類するより外に途はない。かくて人類の社會は永遠に復ることの出来ない悲しい地點に追ひこまれてしまふ。以上明かなるが如く歐米の資本主義政治を母胎とする代議政治は眞に民衆の意見を代表することが出来ないものと斷じなければならない。

今歐米の代議政治以外別に一國一黨、一黨が専ら國務の一切を掌握するといふ制度がある。假令へばソビエツト聯邦の共產黨專政の如きそれであり、又伊太利のファシスト專政の如き、更にナチス獨逸の如き乃至は現在の中國國民黨のごときいづれもこの範疇に屬するものである。

以上の各國における政黨の主義並びに形式は同じではないが、黨によつて國を治めるといふ主張に至つては全く同様である。

この場合黨によつて國を治めることを主張するにはそれ／＼黨としての意義

をもつものである。その黨議は先づ革命の目標として使用される。而してその革命が成功したならば、この獲得した政權を極めて鞏固にして、主義を普及し反革命の起る餘地を與へないやうにするのが必然である。かくてその一黨の專斷政治にならざるを得ないのである。

一黨の專政政治がよく人類を指導するに足るものであるとするならば最初から偉大な効果ををさめる性質のものである。たとへば獨逸のごとく、伊太利のごとく、その國運は極めて隆盛なる一線を辿り、所謂日進月歩の發展をとげるのである。

一方ソ聯の共產黨、中國の國民黨のごときは、その採用してゐる黨制の上に獨裁の明文を記載してはゐない。しかし乍らスターリン、蔣介石は、陰險な謀略に基づいて、黨の権力一國の政權を奪ひとつてゐるのである。彼は決して光

明正大なる態度をとらず、専ら陰險奸詐の手段をもつて巧みに同志を糾合してゐるのである。その結果常に、共産黨の内部においては毎年清黨の犠牲が拂はれ、而も元老とも稱すべき樞要なる地位の人々に至るまで、澤山の人がこの犠牲の下に血を流してゐるのである。

現在のソビエットにおいて國家の重臣といふやうな人々もその地位が危まれてゐるのである。スタリーンの專政の現實は、中國の史上を汚せる彼の桀紂のそれよりも、もつと酷いものがあるのである。

又中國に於ける蔣介石はどうか。彼は、天下を自分のものにしようとする野心の下に革命の假面をかぶつて、中國の政權を獲得したのである。彼は始め共産黨と結びついて一旦結んだ共産黨と袂別、仇敵の間柄となつた。更に最初は廣東に於ける武漢政府を討伐し、ついで南京武漢との合作をなした。始めは閻

錫山、馮玉璋と覇權を爭奪しながら、ついで彼等の歡心を買ふの態度に豹變してゐる。その間何の一貫した信念も方針も見出されないのである。そのかみ共産黨討伐せる者が今日は共産黨と提携を策す。或る時は日本との親善を口にし、裏に廻つては日本に反抗してゐる。洵に朝秦暮楚、手を翻せば雲となり手を覆へば雨となるのオポチュニストぶりである。

自己の榮達と便宜の爲めには人民を魚肉の如くに考へてゐる。

十數年、蔣介石が政權をとつて以來、來る年も來る年も戰爭のみ行はれ人民は聊かも安堵のいとまがないのである。

今や、荒涼無類、所謂焦土政策を實行し、四億の同胞の長となりながら其の一半を殺し去らうとしてゐる。

蔣介石のこの種の行動は、この戰の抗戰は、國を禍ひし民衆を塗炭の苦におと

しゐれるだけで、實に彼の張自忠や李自成の好悪と異るところがないのである。然も彼の罪惡は國民黨の名の下に假借なく行ひ、以てその私慾をほしいまゝにしてゐる。我が中國の同胞の悲しみ、あゝこれ以上のものが果してありや。

五〇

これによつて吾人が知ることが出来るのは、「一黨治國」は徒らに、奸雄スターリン蔣介石に名をなさしめ利用されたものに過ぎない。

彼のスターリンの獨裁政治は、ソビエト聯邦の民衆をして全部犬馬同様に驅使して、些かの休息の餘地をも與へないのである。

一方蔣介石の獨裁は、中國人民の生けるものは、ことごとく塗炭の苦しみに喘ぎ、全國の財産は、恰かも一片の灰燼に歸し去らうとしてゐる。これ故に黨を以て、國を治める獨裁政治は、若しも指導者その宜しきを得なかつたならば、その罪惡は暴虐、專斷なる帝王よりも甚しいものといはなければなら

五。

以上資本主義による代議政治、更に一黨專制に基づく獨裁政治とはその弊害いふに忍びざる幾多の缺陷をもつてゐる。

今こゝに吾人の提唱する新民主主義は「治國の要道」において先づ所謂禮治主義を唱へるものである。

禮の具現方法は和を以てするが最も重んぜられる。

人生理において互に助け合ふのでなかつたならば互ひに生存を全うすることは出来ない。この互に助け合ふといふことは和である。即ち禮の作用は和を致すところのみである。和を致すところの方法は、然らば何かといふと、夫々本分を守ることに存してゐるのである。人類社會はこの膨大なる大衆同志が互にその本分を守り合はなかつたならば、天下は亂れるに決まつてゐる。

五一

これ故に先聖は人民を教ふるに人倫の大道をもつてした。即ち父子の間柄は親を以てし、君臣の關係は義をもつてし、夫婦の間は互にその別を以てする。長幼の間は順序を、明友は信を、この五つは皆人間必然の大倫に屬してゐるものであつて、世に五倫と稱するものである。

この五倫、この五つの方針によつて人生はその道を踏み行はねばならない。これは人生の常道なるが故に五倫は又五常ともいつてゐる。この五倫は、即ち人類の名分である。決して壓迫階級と被壓迫階級などと云ふ對立的のものではない。亦平等と不平等などと云ふ差別が存するものでもない。

凡そ文明の人類なれば五ツ通りの區別があるのである。而してこの五種の同じからざる資格の人に對し施すには相應の五種の教をもつて各々その分を守らしめる。これが即ち禮治思想の根本的意義である。この五倫の教によつて我々

は身を修める第一歩より始まり齊家親郷の順序を経て、治國の最後の目的に到達するのである。

家庭の中には當然主人(家長)があつて一家の家族は皆この主人のいふことと大きく。又一郷の中には夫々郷長といふものがあつて郷中の人は皆これが言ふことに従ふ。

古代中國の制度において、この家庭五戸を單位として比とする。更に比が五つ集つて閭となる。而して四つの閭が集つて族と稱ばれる。族五つて黨にはり、五つの黨で五州で始めて郷となるのである。

而して古代いかにこの郷の政治を重視したかといふに、郷の世話役ともいふべき地位の人は極めて高位の人がこれに任じたのである。即ち郷老ともいはれる様な人は三公の位、即ち太師、大傅、大保ともいふ尊いものであつた。又郷

太夫ともならば。これは六郷の尊さ即ち、太宰、大徒、大宗伯、大司馬、大司寇、大司空と肩をならべるの尊貴なものであつたのである。以て郷治重視の一半を解し得るのである。

こゝにおいてか、政治には先づ省を單位に自治を行ふのが妥當である。而してこの省以下は、縣、區、村に分けるのである。

古代には又、郷舉、里選といふやうな制度が行はれてゐた。よつて我々の選舉制度は一家の主人公を單位としたい。一家の家長を選舉有權者として村長を先づ選み、又村長間の推舉により區長を選み、同様に縣長を選み更に省長を選舉するやうにしたい。かくて約三ヶ年間を経て、各省の民衆から、その自治にあたる各長の徳行や更に才能を考察してその賢能を定める。そうした準備を経たのちに於て、こんどは直接人民の選舉によつて各省長中から一國の長即ち國長

を選ぶべきである。かくの如くして賢能あるものを選び、その適所に任ずる等その方法意志一切は民衆それ自身の中から出るのである。

かくして民衆の選舉したところの人をもつて長とし、これによつて政治を行はせしむるのである。役所において政治をなし、更に下つて區、村に至るまで直接民衆に接するの人も皆民の選み挙げたところの者である。されば利を興し害を除くところのものは、どうして徳行才能の士でないものが選まれるといふことはあり得ない。いづれも皆、徳行才能のあるものとなるのである。

この種の選舉制度は第一家長を以て代表者となし、更に國家は家族を單位として構成することを明かにする。かくて家は所謂親しきを親しむところの道を以て齊へ、更に國家も亦親しきを親しむの道を以て治めるのである。その根本は皆一である。

先づ以て國家を治めんとするには必ず先づ民衆のかくれた點、即ち聲なく形なき點を洞察すべきである。そして民衆の共に好むところを好み、共に惡むところを惡むやうに致すべきである。前述の制度にあつては國長、省長、縣長といふやうな人は本源をさかのぼつてみれば、皆家長から選ばれて來ないものはないのである。よつてたとへ高貴の地位にあつても下情によつて通達してゐる。且つその德行才能は民衆の審判を受けてのち、役に立つので非道の振舞のあるべき筈はない。かくの如くし始めて代議制度にみる操縦の弊害はないのであり且つ一黨專政獨裁における様な弊害もないのである。

これが我が新民主主義により禮治主義を提唱するところの本意である。

(二) 德 治 主 義

以上禮知主義のところにあつても評述したるが如く、官は一切民衆の中から

出でたるものであつて、而して官は必ず民衆を教化する立前になつてゐる。これによつてこそ德治主義は尊いのである。民衆の側から言つて官は師の役に立つものがある。師は又官たる譯である。これ即ち「政教一致の道」となるのである。

恰かもそれは、「政を爲すに徳を以てす、譬へば北辰は衆星、之に拱ふかふが如し」といふやうに、政治家たるものは常に民衆の上に位し、そのなす一言一動は皆天下人民の法則となるものであらねばならぬ。この間の消息は所謂「上、老を老として、民は孝に興り、上、長を長として民は悌に興る。上、孤を恤アハレみては民はそむかず」といふやうであるべきである。即ち、政治家自身より父母に孝養を致すならば、天下萬衆總てみなこれに見倣ふから、いづれも孝行でないものはなくなるのである。政治が率先して長老を良く尊敬するなれば天下皆長老を

尊敬しないものがないやうになる。

五八

政治家が良く孤獨なものを助けてやり、貧乏人を救つてやるならば天下一人としてこれに逆ふものはないやうになるのである。その境地は詩經の「赫々たる師尹、民ともに爾を瞻る」といふ言葉に相當するものである。かくなればこそ政治家は常に良く道徳を養ふことを以て先決要件としなければならぬ。所謂「天子より庶人に至るまで、一に是れ皆身を修むるを以て本となすといふ至極の境地を目ざさなくてはならない。

顧みるに我が中國は近々數十年にして、政治の腐敗、國力の衰弱は實に極點に達してゐるが、その責は直接人民にあつたのではなく、みな爲政者が無道徳であつたがためである。

即ち己を修め、人を治めるといふことが出来なかつたのである。昔のことは

詳しく述べるに足りないとしても、現在の國民黨を以てしても分る。その領袖たる人物の徳を失ひ、行をやぶり平氣で不行跡をなしてゐることは、白日の下明かなことである。即ち、蔣介石一人をとりあげても、彼は糟糠の一妻二妾を弊履の如く捨て、かへりみず、彼の宋美齡夫人を娶つてゐる。これ齊家の道を失へるものに非ずして何ぞや。

又父は國民黨となり、その子は共產黨に走る。國民黨と共產黨が未だ聯携しないうちに、父子互に敵對して人倫の道を失つてゐるではないか。更に彼はやたらに、宋氏一家を容れて國家の富を皆誅求して、民衆を些かも安堵させないのである。謬説の下、亂行を逞しうするは實に宋家の三姉妹、即ち宋美齡、宋暖齡、宋慶齡の三人である。彼女等は暗黙のうちに國家の政治を掌握し、その爲すところ、即ち、牝鷄が晨を告げるやうなものであり、國家人民を滅亡の域

五九

に追ひやるやうなものである。

以上これを考へる時、「一人貪戾にして一國亂る」といふ言葉に該當するものである。

今日こゝに新民主主義は所謂徳治を提唱し、政治を改革し、その根本を肅正し源を清めんとするの計畫をなしてゐるものである。

今後は官に職を奉ずるものは一切、先づその徳行を考へて、才能をあとまはしにするのである。その家を齊へることが眞に是なるものであるかどうかを考へてのち、始めてその國政を委ねしむべきである。

思ふに上に立つ爲政者の徳行の有無といふことが、ひいて、國家興亡に影響するものであり、その間の微妙なることは前述のこととて明かになつたと思ふ。こゝに於いてか我々は心を潜め考慮をめぐらし、この三つの點に慎重なる思索

をめぐらさねばならないのである。

(三) 生産主義

禮治主義によつて、政教は合一することが出来た。かくて人間は治安の道に安堵することが出来れば次の段階においては所謂生命を養ふ本然の道を重視しなければならぬ。是れこゝに新民主主義を提唱する所以である。

元來西洋に於ける經濟學説は、大抵分配の改良に偏してしまひ、生産の改良といふことを研究しない。たゞ分配不均等なる表面の結果のみをみて、それを生産の上における不均等と誤信してゐる。

今日の國家社會主義や共産黨の生産集中、分配集中といふやうなものは、いづれも皆特權資本家階級の生産の分配壟斷に反對して興つたものである。

而して國家社會主義は、重要な生産事業はいづれも國營に歸してゐる。し

かしながら國營にすることになつて、往々官僚主義の弊害を發生して、國營事業はこれがために遅々として進まないといふ致命的な缺點をもつやうになる。又ソビエツト聯邦の生産集中にあつては、日常生活必需品にして一つとして國營でないものはない。

國營によつて作られたる品物が全く劣悪なものであり、更にその生産能率の低下に至つては、天下何人も等しく認めてゐるところである。その生産集中に比して而も一方分配集中の方は極めて細かく、一片のバン、一足の靴に至るまでも小面倒な配給が規定されてゐる。よつて靴のために靴官が出來、バンのためにバン官といふ役人が居るやうな仕末である。而して人民は一片のバンを喰べ一足の靴を穿くためには甚しいものは、一日中首を長くして、立ちあぐみながら待つとも終に目的を達しない場合すらある。かくて人民の自由といふものは

全く剝奪されてしまふ。

以前資本家の生産壟斷を叫んで立たつたものは今のソ聯邦であつた。而して生産集中をこれに置きかへた。しかしながらその壟斷せられるものについて考へれば、資本家のそれに百倍する甚しい壟斷が現在行はれてゐるのである。又分配も同様に資本家の分配壟斷を潔きよしとせず、分配集中をなしてゐるがその實、資本家時代の百倍もの壟斷に苦吟してゐるのである。

今我々の新民主主義においては、既にこの資本家の生産分配の壟斷を除き更に又社會主義の國家生産分配集中の壟斷をも除去せんとするものである。よつて吾人が注意する肝要な點な、分配不均の結果の方よりも生産不均の原因についてである。

機械工業の發達以來、資本家は自己の利益を慮り、所謂大量生産大量分配の

學説を頻りに唱道してゐる。共産黨もついに之れに依據したため今日の如く人
民生活を壟斷する弊害を醸し出してしまつた。

思ふに人間が使用するものであることは當然明かなことであるにもかゝはら
ず、世界の經濟學説、特にマルクスの學説は、人を輕んじて機械を重んずると
ころの、所謂機械が人生を支配するといふことを認めてしまひ、人生をして機
械を改革せしむるといふ本然の點を見失つてしまつてゐる。例へば靴は人間を
本位として必要であり、その足に即して作らねばならぬにもかゝはず、靴を
穿くために足がある。よつて足に合はなければその足を削つて穿くといふ様な
誤謬に陥つてしまふのである。これは恰かも人間をして機械の範疇に追ひやる
ものといはねばならない。

言ふまでもない、人間が機械を用ひるのであるので、機械が人間を使用する

のでないのである。よつて、機械の中でも人間生活に有用なるものは之を用ひ
るが有害なものはドン／＼我々の生活から排除しなければならぬ。

古人が「奇技淫巧」を廢除することを主張したのは、即ちこの人を害すると
ころの機械をさしたものである。

大量生産と大量分配の結果は資本家階級が獨り富むばかりで、一般人は愈々
貧窮へと追ひこまれてしまふ。見よ！ 千百萬の夥しい職工を都會に集中され
る結果は、所謂都會文明はこれに伴つて起るが、一方農村は全く破壊されてし
まふ結果となる。更に勞働者對資本家の問題は、延いて、社會革命を惹起し、
更に多數の異民族が雜居する結果、所謂そこに都會惡の華が跳梁するのであ
る。

農村の破壊は人間に於ける貧血のやうなものである。これに反して都會文明

は腦溢血状態に陥つた人間のやうなものである。されば、我々がこの都會並びに農村の畸形状態を糾正しようと思ふならば、こゝに工業の農村化を主張せざるを得ないのである。

彼の大量生産並びに大量分配を主とせず、生産に必要な機械は農村にも分配するのである。

主として技術家に期待し、資本家の利益を以て出發點としない。

資本家は大量生産に必要な工具を利用させ、農民の利益をその出發點とするのである。そして農民に家庭生産の工具を利用させるのである。今日の輕工業のやうなものはどうしても以上のやうな方法で農村に分配せねばならぬのである。

即ち、農村には元來發電に要する動力がある筈である。さすればそれをその

儘即座に、近代生産工具に利用して用ふるのである。新民主義に於ける生産主義はかくの如く、近代的な生産工具を、従來男耕女織の未發達の状態にあつた農村社會に利用の途を開くと共に、自給自足の利便を講ぜんとするものである。

農村が現在の未發達な原始的産業生産から一躍して近代的な機械利用によつて、彼等の生活も改善され、更にこの工業の農村化によつて今日行詰つた都會文明の弊害は除去せられるであらう。かくて農村固有の諄風良俗は保存せられるであらう。

然しながら一方、農村に持ちこむことの出家ない大規模な、所謂近代工業中の重工業部分については如何としても家庭乃至農村はその生産場たり得ない。よつてこれらは公營にするより仕方ない。然しながら公營事業は往々官僚化の

弊害に陥るといふことは上文に既に述べた通りである。而してこの公營事業の官僚の弊害を救はうと思ふならば、何よりも先づ、公營事業を管掌する人は必ず、徳望才能のある人を拔擢しなければならない。

従来資本主義の下に任せられた、重工業乃至は公營事業を主管する人は多く資本家關係か、然らざれば政治家關係の人である。その適材適所に非ざるものを用ひるから、事業はそのために大いに失敗に歸してしまふ。

故に我々は國營事業をなすに當つては、一つの「生産總機關」とも稱すべきものを特設することを主張するものである。而してその政務役員は又人民の選舉によつて出すべきである。たゞそのため生産方面に特殊の勢力閥が出来ないやうにしなければならぬのである。

次に、土地問題であるが、吾々は土地の分配については端的に反對を表明す

るものである。何となれば全國の土地いづれもその土質を異にしてゐるのである。従つて本來分配し得べきものではないのである。たとへば江南地方においては僅か十畝の土地を耕しても一家を支へることが出来るが、反對に江北地方においては十畝をもつ程の農家でも生活困難であり。江南に移民すれば苦力になり終る。よつて、たとへ土地は多くても生産は不足する勘定になる。以上いかに分配の困難なるものであるかを雄辯に物語つてゐるものである。

又江南地方の農民は十畝の土地をもち年中勤勞を續けるならば始めて生計を保持することが出来る。しかしながらその同様の勞働分果を職工に於ける場合と比較してみると、土地を所有しない職工の方が収入の點は、はるかに農民よりも多いのである。

中國に於いては農民の生活が今日最も苦しいのである。先づ農民の生活を向

上させ苦い境地を脱脚させてやる事が最喫緊事である。

しかしながらこゝに問題なのは今よりも農民の生活が向上した場合はその生活費の膨脹のため、土地を多く與へても結局収入不足となり、その勞力を全耕地に集中しても結局凍餓を免れることは出来ないであらう。よつて農民生活を向上させるのは土地を増すといふよりも、むしろ農民の生産能力を増加せしめなければならぬ。

生産能力を増す即ちその生産方法を改良せしめると共に、同時に一定の生産に對し、更に副業を與へてやれば収入は増加するであらう。

よつて、中國に於ける人民の生活問題は、分配の不平等に存するのではなく生産の不足にあるのである。新民主主義の説く生産主義は、土地問題の解決を主張するに際して、分田即ち土地分配の道を講ずるのではなく、地利を開發し生

産を増加することに眼目を置くものである。

壬、平天下

若しも土地問題について根本的解決を求めらば王道を實行することによつて始めて完成せらるべきものである。

元來天には些かの私情もない。公平にして無私なるものである。同様に地にも土にも全く私情といふものはない筈である。

土地は天下の土地であつて何人の土地でもあり得ない。

ところが今、こゝに或る者が、土地を指してこれは我が家の土地である。我が家の私有財産であると主張する。更にまた國があつて、この領土地は我が國の領土であるといつて譲らない。家と家との財産争も國と國との領土争も源を

こゝに發するのである。かくて富める者は廣大なる土地を所有し、家作を市内に充滿せしめてゐるも、これに反し、貧乏人は住まんとするも家なく、耕やさんとするに猫額大の土地すら残されてない。

國家と國家も亦同様である。或る持てる國と持たざる國がある。或る國は滿腹感に浸つてゐるが、或る國は空腹の餓を啣つてゐる。或はこの土地の不平等こそ現代における種々の渦亂を起す原因をなしてゐるのである。依つて一國の間には土地の分配問題が發生考慮され、國際間には、資源の分配問題が發生検討されるやうになるのである。

然しながら決してこの土地の分配に於いては、各個人が誰でもみな平等に所有できるものでもなければ、各國がみな均等に土地を領有することが出来るものではない。

その問題についても大學の書に於いては、

「人有り、此に土有り。土有りて、此に財有り、財有りて、此に用有り」と結論してゐる。よつて土地の所有は徳のあるものが持つべきであると、吾人は主張するのである。

個人關係に於いても又同様である。況んや國家においておや。「大徳を生と曰ふ」土地生産のそれをもつて人間を養ふものは有徳の人とするのである。そして有徳者は土地を領有することが許される。それ故に敗家の子はその財産を失ひ、敗れた政府は當然領土を失はなければならない。これは優勝劣敗の織りなす天理の必然である。

今や天下を平安の治世にかんとするならば、天下の土地を擧げて領有せしむることではなく、天下の有徳者に委譲せしめるのである。これが王道天下の

大義である。

思ふに、有教あるもの總て四海は皆同胞兄弟である。今や世界は或は民族主義が叫ばれ、或は國家主義が説かれ、互ひにむやみやたらに相抗争してゐる。狭い見解も甚しい次第である。

新民主義においては文化の流れを同じくするものは同盟をその間に聯結し、以て日本、中國、滿洲の三ヶ國は一聯盟として行動すべきことを主張するのである。

日華滿、三國の同盟から更に進んで、大亞細亞の聯盟とし、最後には亞細亞を中心として、天下萬邦を協和して共に王道天下を形成するとき、初めて世界平和が實現されるのである。

結 論

新民主主義の理論と實行とは既に述べた通りである。しかし乍らこれを歸納してみると、次のやうに言ふことが出来る。

即ち、新民主義は「新民史觀」をもつて理論的基礎となし、人類の進歩は、一つの循環的に生起する善惡の増減によるものであるが、この善なるものを選択して、固くこれを把持する精神に本づいて王道を實行するものであると云ふことが出来る。

而してこの王道の實行は、要するに克己復禮の二つをもつて根本とするのである。克己は格物、致知、誠意、正心、修身の五項目に分れ、更に復禮は齊家、親郷、治國、平天下の四項目とする。

格物とは然らば何かといふに私心を去ることであつて、致知とは人間本然の良知を發揮すといふことである。誠意とは勵み行ふことであり、正心とは思ひから邪惡を除くことである。更に修身は所謂人格を修むるのである。以上はいづれも皆、克己修養の工夫である。

復禮の道は先づ家を齊へることにある。即ち齊家の道は人としての踏むべき人倫を正し、男女夫々本分をわきまへ、それに従ふのことである。

西洋思想の個人主義を否定反對して、孝悌の秩序が根本をなしてゐる家族主義を提唱するのである。而して更に最も人生の終局を注視し、遠き昔に慮りを致すことに注意して所謂祭政一致の道に到達するのである。次に親郷、即ち地方自治に在つては、親しきを親しむの道を以て民衆を教化し、諄風美俗を振作するのである。地方自治に於ては官治と警察とに陥らざるやう注意する。

次は治國の問題であるが、政教の合一をもつて主とするのである。よつて禮治主義及び道德主義を提唱して生産主義の妙諦に及んでゐる。禮治主義に於いては、先づ歐米の資本主義に派生された代議制度及び一黨專制のファッショ政治に反對するのである。

一家の主人即ち家長を單位として、人民を代表する各方面の官吏の選舉をなして民意を暢達する。しかもその際、徳も備り働きも充分あることが官吏被選の資格とすることを提唱するのである。

徳治主義は「己を修め人を治む」の道を提唱して、その點より婦人の參政問題に反對するものである。

第三の生産主義においては、機械を改良し、機械に使はれるに非ず、機械を利用して、生活を豊富ならしむる、理想に適合した人生を主張する。そして機

械によつて社會改造をなす種々の學說に反對し、以つて工業の農村化を圖り、終焉なき機械文明をして農村に分散させ、その貧窮を救はせるのである。それと共に都會文明の惡の華及び勞資の間にみるいざこざを發生させず、重工業の公營を主張し、然もそれに當る、政務の役員は、人民が選舉すべきであるといふ點を主張し所謂官僚化の弊害に陥ることを防いでゐる。

次に土地問題に對しては彼の無條件なる分割制度をとらず、専ら産業を開發することを主張し、土地をして土地本來の利益を發揮させる、そして生産の増加を圖り、民衆の生活の向上改善を企てるのである。

即ち天下を平らかならしむる道は、徳さへあらば自然それに伴つて土地があらねばならぬことを力説するのである。その間種族や國境を分けずに「教あるところ分類なし」の説を提唱して所謂狹義の民族主義と國家主義に反對するも

のである。

よつて日本支那、滿洲三ヶ國の聯盟を主張し、ひいてはそれを基礎に大亞細亞の聯盟にまで發展させ、それを推して世界中を王道の天下に協和せしめんとする理想をもつものである。

中國は想ふに、西洋思想の侵入を受けて一世紀近い歴史を閲してゐるのである。その間西洋思想の長所は未だ完全に吸収してはゐないが、東洋固有の文化は反對に全く湮滅してあとかたもないやうになつてしまつてゐる。

特に蔣介石が國家の權力を竊み取つてより、特に東方獨特の固有の文化は喪失して將につきなんとするの悲運に立ちいたつてゐるのである。

今日更に共產黨と聯結し、それがため東亞全體が赤化の厄に見舞はんとすることも願みず、抗日を續けることを以て我事なれりとしてゐる。これぞ一人一

黨の缺點たる私欲をほしいまゝにして、人民の財産を犠牲にすることを少しも
いとはない。所謂焦土政策を敢行してゐるのである。

幸ひにも我が友邦日本は義憤に感じて軍を出すに至つた。これは無辜の民を
弔ひ、國民政府の罪を伐つものである。又一面東方文化を復興し、中國四億の
民衆の渴望に答へんとするものである。

これにより、新民主主義は蔣政權の没落にかはつて生ずべき宿命にあるもので
ある。正義の發揚せられるときは即ち邪説の滅びるときであらねばならない。

光芒は萬丈に發して、宵には消え匿れる。願くば、我と我が身に彼の蔣政府の
焦土政策の痛苦を受けてゐる同胞よ！新民主主義を信仰し、新民會の旗幟の下に集
つて、支那日本と手を携へ、共産黨を討ち蔣介石を倒し、中國を復興し様ではな
いか。東亞を吾人の手により復興せしめよ。光榮の時正に至りぬ、幸なるかな。

新 民 主 義

昭和十三年五月五日印刷
昭和十三年五月十日發行

複製
不許

新民主主義

金三十五錢

翻譯者

寺島隆太郎

發行者

井田勝久

印刷所

東京市牛込區西五軒町五十二番地
青年教育普及會印刷部

發行所

東京市神田區一ツ橋・教育會館内
振替口座東京一二七七番
電話九段(代表)四一五一番

青年教育普及會

發行圖書一覽

(圖書目錄贈呈)

九州帝大教授 文學博士	鹿子木員信	新日本主義と歴史哲學	金五十錢 送料四錢
國學院大學長 文學博士	河野省三	日本民族の信念	金三十錢 送料四錢
廣島文理大教授 文學博士	西 晋一郎	歴史と教育	金三十錢 送料四錢
東京文理大教授 文學博士	吉田靜致	人格の生活と現代の社會	金三十五錢 送料四錢
東京帝大講師 文學博士	紀平正美	日本精神と辨證法	金五十錢 送料四錢
史料編纂官 文學博士	中村孝也	現代思想の歴史的批判	金三十錢 送料四錢
東京帝大教授 文學博士	吉田熊次	國民理想と教育	金四十錢 送料四錢
京都帝大教授 文學博士	牧 健二	日本國體への反省	金三十錢 送料四錢

東京市神田區 青年教育會 九段(代表) 一五一番
東京市神田區 青年教育會 九段(代表) 一五一番

京都帝大教授 文學博士	高田保馬	我が國の農村問題	金四十錢 送料四錢
廣島文理大教授 文學博士	西 晋一郎	我が國の教育	金三十錢 送料四錢
國學院大學教授 文學博士	武田祐吉	國文學に上代の日本思想 現れたる	金四十五錢 送料四錢
廣島文理大教授 文學博士	清原貞雄	日本精神と其の顯現	金三十錢 送料四錢
慶應大學教授 文學博士	川合貞一	マルキシズムの哲學的批判	金一圓也 送料六錢
京都帝大教授 文學博士	高田保馬	マルキシズムの經濟學的批判	金七十錢 送料四錢
京都帝大教授 經濟學博士	作田莊一	日本國家主義と經濟統制	金七十錢 送料四錢
東北帝大教授	村岡典嗣	國民精神の淵源	金三十錢 送料四錢
京都帝大教授 經濟學博士	作田莊一	現代國民經濟の趨勢	金六十錢 送料四錢

東京市神田區 青年教育會 九段(代表) 一五一番
東京市神田區 青年教育會 九段(代表) 一五一番

覽一輯類想思

國民精神文化 研究所所員	山本勝市	私有財産制度の意義	金四十錢 送料四錢
内務省警保局	緋田工	日本精神と社會運動	金八十錢 送料六錢
早稻田大學教授	五來欣造	フアッシズムと其國家理論 <small>(特別附録) イタリー勞働憲章・ドイツナチス綱領</small>	金八十錢 送料六錢
國民精神文化 研究所所員	藤澤親雄	近代政治思想と皇道	金七十錢 送料四錢
伯	金子堅太郎	帝國憲法制定の精神	金三十錢 送料四錢
國學院大學長	河野省三	我が國體と日本精神	金一圓三十錢 送料十錢
明治大學教授	森吉義旭	近代思想の動向と日本憲法	金八十錢 送料六錢
國學院大學教授	植木直一郎	國史と日本精神	金一圓二十錢 送料十錢
國學院大學道義學會編		本居宣長研究	金一圓八十錢 送料十二錢

東京市神田區
教育會館内
青年教育普及會
電話九段(表代)一五一五番
電話二一七七一番

文部省藏版	國民精神作興叢書(十二年版)全五册	金六十錢 送料十錢	
東京帝大教授 文學博士	深作安文	金五十錢 送料六錢	
國學院大學道義學會編	幕末勤皇思想の研究(六大專門學者執筆)	金一圓五十錢 送料十四錢	
協調會農村課長	松村勝治郎	金三十五錢 送料六錢	
國民精神文化 研究所所員	河村只雄編	金一圓八十錢 送料十四錢	
日本中央放送 協會教養部長	小尾範治	金一圓三十錢 送料十錢	
日本中央放送 協會教養部長	小尾範治	金一圓六十錢 送料十四錢	
慶應大學教授 文學博士	川合貞一	金四十錢 送料六錢	
東京帝大講師	大島正徳	現代社會意識の批判	金五十錢 送料六錢
ドイツ大總統 宣傳大臣	ヒツトラー	人民戰線に對するナチスの宣戰	金五十錢 送料六錢

東京市神田區
教育會館内
青年教育普及會
電話九段(表代)一五一五番
電話二一七七一番

西崎善男著	安倍季雄著	安倍季雄著	安倍季雄著	安倍季雄著	内山憲堂著	同	蘆谷蘆村著	小川未明著	日本童話協會編	元師範學校教諭 矢袋喜一著
海軍物語	實演童話	實演童話	實演童話	實演童話	指遣人形劇の製作と演出	お母様のお話 (附) 幼児童話	童心は微笑む	童話と隨筆	世界童話史	琉球古來の數學と結繩及記標文字
輝く海城	日の丸日本 (文部省認定)	日本よい國 (文部省認定)	安倍季雄文庫 (文部省認定)	全十册各金一圓 送料各十錢	金二圓 送料十錢	金一圓五十錢 送料十錢	金一圓六十錢 送料十錢	金一圓六十錢 送料十四錢	金三圓 送料廿二錢	金一圓二十錢 送料十錢
發行所 東京 荻原 七五九 五番 內 教育會館 東京 荻原 七五九 五番 家の教育 社										

終

